

『昭和の名曲・喝采』

文 伊藤公一

text by Kouichi Ito

「いつものように幕があき、恋の歌うたう私に届いた報せは黒いふちどりがありません。あれは三年前、止めるあなた、駅に残し、動きはじめた汽車に、ひとり飛び乗った」

50歳代以上の読者であれば、哀愁に満ちたメロディが浮かんでくるものと思うが、1972年9月に発売され、その年の日本レコード大賞に輝いた名曲『喝采』の唄い出しの歌詞である。リリースから3カ月でのレコード大賞受賞は史上最短記録であり、歌謡曲全盛時代、圧倒的な歌唱力を持つ、ちあきなおみは、このヒットでトップ歌手の地位を不動のものにした。

歌詞の内容は、主人公の女性歌手のもとに、恋人の訃報が届き、心に傷を負った彼女は、それでもプロフェッショナル意識を持って、恋の歌を舞台で唄いつづけ、何も知らない聴衆より拍手喝采を受ける……というストーリーである。

この曲は、ちあき自身がまだ十代だった下積み時代に、恋人を病で失い、その際の悲しみをイメージして、「私小説歌謡」として売り出された作品である。そして作詞家・吉田旺、作曲家・中村泰士、担当ディレクター・東元晃の間で「妥協のないものづくり」として

始まり、レコーディングの際には、ボーカルブースが黒いカーテンで囲まれ、ちあきは誰にも姿を見せることなく声を出すために裸足で臨んだという逸話。彼女が、歌詞が自身の辛い経験とあまりにも重なっていたため「私、この歌は唄いたくない」とマネージャーに言ったというエピソードが残っている。

当時、中学生であった自身には、この歌が、どのような経緯で出来上がったかを知る術も無かったし、深い歌詞の意味を読解するほどの大人力も無かったが、限りなく重厚な楽曲と捉えたことは、はっきり覚えている。

とはいえ、その時代、失礼ながら、14歳男子から見ても、ちあきなおみが、ベテラン歌手のようで、若々しく垢抜けたアイドルには全く見えなかった。

そして、この年齢となつて驚いているのは、老け顔（失礼！）ながら、三年前に配偶者を失い、いわば未亡人となった女性役を、大人の制作者が、25歳の、ちあきなおみに託したことである。

15歳から65歳を生産年齢人口、75歳以上を後期高齢者と画してはいるものの、皆が長く生きられることを望んで（生きていることよりも活きていることの方が大事だが）、突然の如く提唱され

ている「人生100年時代」。

長生きには医療のアシストも大きなところだが、都会の女性を見る限り、学歴が向上して、職歴が重視され、結婚年齢も出産年齢も上がってきた現在、真剣な恋愛をする年頃も、当然に高齢化しているわけだ。

流石に「15でねえやば、嫁に行き」まで昔の時代ではなかったが『喝采』のヒットから46年が経過した現在、25歳の女性にいわば未亡人となった悲しみを唄わせる企画は、まずもって、あり得ないことであろう。

Profile

1958年生まれ。伊藤病院3代目院長。北里大学医学部卒業、東京女子医科大学大学院修了。医師になって以来、国内外にて一貫してバセドウ病、橋本病、甲状腺癌など甲状腺疾患に対する診療と研究にひたすら従事。東京女子医大、筑波大学院非常勤講師。日本医科大学、了徳寺大学客員教授。日本内分泌外科学会、日本甲状腺外科学会理事。厚生労働省診断群分類調査研究班班長。伊藤病院<http://www.ito-hospital.jp/>名古屋甲状腺診療所（名古屋分院）<http://www.kojin-kai.jp/nagoya/>さっぽろ甲状腺診療所（札幌分院）<http://www.kojin-kai.jp/sapporo/>

